

宋明思想史の一断面

——劉因の「渡江賦」の周辺をめぐって——

石^{*} 田 和 夫

一

異族元の支配の下、元への出仕を最後まで拒否した儒者劉因（一二四九～一二九四）の文集中に、「渡江賦」なる一文が収められている。全篇を貫くテーマは「渡江」、すなわち元による南宋侵攻。元の使者郝経を九年もの間幽閉して還さない宋の非道に業を煮やして挙行された侵攻。これを是とする北燕の処士と非とする淮南の劍客、この二人の問答によって中身のほとんどは占められる。四部叢刊本『静修先生集』を始めとして、彼の多くの文集にはみあたらない長大なこの賦の梗概を、『静修先生文集』（弘治十八年序刊 内閣文庫所収）によって、今ここに掲げる。①

元の侵攻を壮挙とし、為に「地勢を計り、攻守を審にし、將に渡江の策を草して以て之を助けん」、とする北燕の処士の言葉によって幕が切つて落とされた二人の問答。この言葉に、「今茲の大挙、長江必ず渡る可きか。江東必ず克つ可きか。君、其れ、我が為に其の勢いを言え」、と淮南の劍客が迫る。この挑発を受け、地勢の詳密な分析を背景にした圧倒的に元に利あり、とする戦況予測が処士によって開陳されるが、その締めくくりとし処士の次のような刺激的な言葉が吐かれる。

哀しい哉、宋君。憐む可きなり。戦えば則ち黄泉の土と為り、降れば則ち青衣の奴と為る。上は奎宮の運を絶ち、下は皇祐の区を失い、草、金陵に満ち、鹿、姑蘇を走り、五溪は焦土となり、七澤は丘墟とならん。何ぞ其の痛ましきや。

予測される宋の哀れむべき末路。まだまだ余裕の劍客も負けじと、地の利は我にこそあること、さらに氣象条件まで味方につけた南宋軍の万全の防戦態勢等を挙げ、

義士の奮袂、良將の登壇有れば、既に枕戈の劉琨有り、豈に擊楫の謝安無なからんや。祖逖を假るに、黄鉞の威を以てし、陸遜を拝するに、都督の権を以てす。曹公赤壁の役、苻融合肥の戦、公、獨り之を聞かざるか。

と応戦。劍客のこうした抵抗にとどめを刺すべく、ついには元に勝利がもたらされなければならない五つの理由が、処士によって数えあげられる。この賦のいわばクライマックスシーンである。

表裏山河は敗るるに備うるのみ。堅甲利兵は敵に應えるのみ。勢を以て勢を御ぐは、固より未だ其の孰れか利なる

かを知らざるも、曾て知らずや、之に應えるに大機を以てし、之を昭らかにするに大義を以てして、御ぐ可からざる者有るを。我、子の為に之を籌せんことを請う。我、直にして壯、彼、曲にして老。我、名有りて衆、彼、義無くして小なるは、一なり。彼の江塞の地は、盤亘すること萬里にして、兵を分けて以て之を守れば、則ち力懸てられて勢屈し、兵を聚めて以て之を守れば、則ち此を保つも彼を失うは、二なり。彼、衣帯の水を持し、手掌の隅に拠れば、將は墮して兵は驕り、傲して我を虞れず。其の備え愈々久しくして、其の心愈々疎きは、三なり。彼の刑鄂の民、旧と剪伐を経、久しく瘡痕を痛めば、旃裘を見て、膽落ち、毳窟を夢みて、魂飛ぶ。今、大挙を聞き、重ねて芟夷を被れば、人心揺落し、士卒崩離するは、四なり。彼、我が奉使を留め、我が大邦を讎とし、天下の英雄をして纒を請い、浪を破りて長江を帛視せ使むること、亦た年有り。今、天、將に啓かんとし、宋、將に危からんとす。我が中国、將に合せんとし、我が信使、將に帰らんとす。天に應じて人に順い、征ありて戦無きは、五なり。孰か宋の置す可からずと謂わんや。

さすがの淮南の劍客もこれには万事休す。「怙然として氣を失い、牆に循いて匍匐し、口怯え、心碎けて對うる所以を知らざるなり」。決定的な敗北を示す語で「渡江賦」の幕は閉じられるのである。

以上が「渡江賦」の梗概である。漢人である劉因にとって、渡江には心中穏やかならざるものがあつたはずである。出仕を頑なに拒みつづけた彼の生ざまにも元への抵抗の姿勢は容易に窺える。しかし、たとえ北燕の処士も淮南の劍客も、どちらも劉因の分身であつて、彼の心中が渡江に揺れ動いていたとしても、「渡江賦」の表層につく限り、彼

が異族元の南宋侵攻と中国支配とを肯定していることは疑いえない。元による中国統一の正当性を主張する処士の言葉は、どれも確信に満ちている。「渡江賦」が、王莽の篡奪政権新を讃えた揚雄の「美新論」とともに、「千古不白の疑」（明儒学案卷四十二 唐伯元醉經樓集解）とみなされる所以である。

およそ百年の歲月の後、胡元は明によって駆逐される。新王朝が立つや、異族支配という忌まわしい過去のこの歴史事実を振り返って、様々な議論が沸騰する。偽作説（明儒学案卷四十二 唐伯元醉經樓集解）まで飛び出して、恰好の議論的にされた「渡江賦」。ここではこの「渡江賦」の解釈をめぐって交わされた後世の人々の様々な議論と、その作者劉因及びそのライバル許衡評価の周辺を追ってみる。はたして、宋明思想史のどんな断面が切り出されるのか。②

二

「渡江賦」に関する後世の人物の発言で先ず目に留まるのは、『大学衍義補』を著して明朝初期の官界で枢要な位置を占めた朱子学者丘瓊山（一四二一—一四九五）のそれである。丘瓊山の元人評価の最大の基準は、所謂節義の問題。特に異族に膝を屈したか否かが何よりも厳しく問われる。従ってその学識が高く評価され、朱子学の普及に大きく貢献した劉因のライバル、あの許衡のごときも、まずはこの点で排除されることになる。劉因と違い、元からの初めての招請に飛びついた許衡は、自らの死に際し、死後に諡を請わず、墓石には「許某之墓」の四字だけを書けば

よい、と言ひ残したというが、元への出仕の非であることを自ら悟り、深くこれを悔いたからに他ならない。しかし、いくら悔いても時既に遅し。どれほど大きな功績を残したとしても、仕えてはならない君に仕えたという一点ですべては帳消し。永遠に消し去れない裏切り者のレッテルが貼られてしまふ。

夫れ、之を義と謂うは、宜なればなり。仕う可ければ則ち仕え、仕う可からざれば則ち仕えず。其の宜に合えば則ち義と為し、其の宜にあわざれば則ち義に非ずと為す。夫れ中国の人を以て周公・孔子の道を学び、群胡の中に難わりて、冠を毀ち、珥を裂きて以て胡主に事え、以て我が中国帝王の統を絶つ。宜為るか、宜ならざるか。

(世史正綱 卷三十五、五丁)

華夷の弁と君臣の義とは疑いを容れない不動の定理。絶対の理によって華夷の弁と君臣の義とが強固に結び付けられ、異族の君主、すなわち仕うべからざる主君には仕えないという揺るぎない觀念が形成される。道義を見誤った哀れむべき裏切り者。そんな評価で許衡は切り捨てられるのである。

異族支配下でのこうした許衡の処世に比べれば、元への出仕を拒絶して、「隱居教授して道を明にして以て其の徒を淑し、言を立てて以て俗に範たった」(世史正綱卷三十一 五丁)劉因のそれは高く評価される。仕うべからざる主君に仕えなかった出処は、異族支配下での漢人の出処としては、まさに模範的。だれもが見習わなければならない。しかし、異族による宋への侵攻と中華支配の肯定となると話は別。

嘗て元初の一時、腹心股肱の臣、中国の人多しと雖も然れども、其の叅養を受け、其の富貴を貪り、其の身の華為

るを忘れ、並びに一人の言の、其の宋の存するを勧る者なし。劉因の賢を以てすと雖も、猶お渡江賦を作りて以て忻びて之を幸として、「戦へば則ち土と為り、降れば則ち奴と為る」の語有り。(世史正綱卷三十 十二丁)

「哀しい哉、宋君」とは、一体何事なのか。長期にわたる見聞・習染に局せられ、宋が、絶ってはならない中華の正統の継承者であることを、彼は完全に忘れ去ったのである。「渡江賦」はその何よりの証拠。いくら美辞麗句で裏切り者の正体を糊塗しても無駄なこと。宋の滅亡を幸としているのは明らかではないか。これでは宋討伐の策を世祖に問われ、沈黙を貫いてまがりなりにも華夷の弁を維持した許衡のほうがまだまし。「渡江賦」は全否定され、劉因の評価は地に落ちる。許衡以上の裏切り者。劉因にはそんなレッテルが用意される。劉因の孔廟従祀は丘瓊山によって阻止されるのである。③

異族元の宋への侵攻と中華支配を肯定する詩賦。「渡江賦」をそんな詩賦とみなし、その作者劉因を厳しく非難する丘瓊山。興味深いのは、理を絶対視する、タイプとしては同じ部類に属する思想家でありながら、彼とは正反対に劉因を高く評価する思想家がいるということである。我邦江戸時代に活躍した山崎闇斎門下の浅見綱斎のごときがそれである。綱斎は『靖献遺言』を著わし、その巻七に劉因を採録した。これにより当時知る人の少なかつた劉因の名が、屈原・諸葛孔明・陶淵明・文天祥等と並ぶ忠臣義士として我邦に知れわたったのである。それでは綱斎はなぜこれほどまでに高く劉因を評価したのか。綱斎の高弟若林強斎が、「遺言ニノル八人ノ衆画像モ本集モノコリノ衆ハ皆ミタガ、此ノ人バカリハミス、劉静修集トテ五六卷アルト云ガ、コレモ見ヌ、ナニトゾ此人ノ詩集ヲミヨフトヲモイ、

唐本屋ヲ長崎マデタズネニヤツタレドモミエヌ」(靖献遺言摘注)と証言するように、当時、我邦で「渡江賦」を目にすることはきわめて困難であった。つまり、綱齋は「渡江賦」を目にしていなかったというのである。事実、『靖献遺言』でとりあげられた劉因の遺文は、「燕歌行」。「渡江賦」ではないのである。異族に蹂躪され荒廢する故郷燕の地。異族支配の悲哀を切々と歌い上げた「燕歌行」は、静かではあるが力強く異族支配への抵抗の意思を表明した作品として知られている。ここでは、元への抵抗が示めされているだけ。元の南宋侵攻と中国支配を肯定するような言葉は見当たらない。「燕歌行」は知っていても、「渡江賦」は知らなかった。だから綱齋は劉因を高く評価し、『遺言』に採り上げたということになる。今田主税の「劉因の全集に渡江賦有り。元主に勸るに江南に使いするを以てす。文・置二山之を見れば、必ず其の面に唾し、其の肉を食わん。綱齋先生、蓋し未だ全集を見るに及ばず。而して遺言を編み、遂に千古の疑團を釀す」(靖献遺言摘注)もそうした推測を後押しする。そうなると、綱齋の劉因評価が「渡江賦」によって反転する可能性は十分にあることになる。それどころか、綱齋は『遺言』に劉因を採録しなかったかもしれないのである。あくまでも推測の域を出ないが。④

丘瓊山と浅見綱齋、劉因の評価は正反対のようでも、実は思考様式には基本的な違いはない。正反対の方向に分かれてゆく分岐点はひとえに華夷の弁であり、君臣の義。両者ともこの点はいささかも揺るがない。理を絶対視する立場に立つ思想家の思考様式がここにははっきりと示されているのである。

丘瓊山が明初なら、やや下った成化から嘉靖年間。王陽明とほぼ同時代に生き、陽明心学の敵対者として知られる羅整菴（一四六五〜一五四七）の場合を見てみよう。元の支配はすでに過去の歴史の一こまになりおわたったのか、整菴の、劉因や「渡江賦」を見る目は、感情に激しがちな丘瓊山等に比べて至って冷静である。劉因の出処を評価しないという結論において相異はないものの、これを導き出す経緯は丘瓊山のそれとは全く違う。羅整菴の劉因評価の一端を以下に掲げてみる。

夫の出処の際の若き、議する者或るいは其の仕えざるを以て高と為す。亦た未だ静修を知る者と為さず。嘗て其の渡江の一賦を觀るに、其の心、惟だ元有るを知るのみ。元の為めに計る所以の者、是くの如く其れ悉せり。仕えざる、何の義か。其の集賢の召きに赴かざる、実は病を以て阻まれ、蓋し年を踰えて、遂に卒す。其れをして尚お在ら使むれば、固より將に時に相たりて動き、以て其の求むる所の志を行ひ、必ず自ら隱逸の流に安んずるを肯せず。

（困知記続卷上）

元への出仕拒否を貫いた高士。ここではまず劉因のそんな一面が全否定される。その根拠として挙げられるのが他にもない「渡江賦」。劉因がここで元による宋の侵攻と中国支配の現実を認めているのは明らか。元に対する忠誠心すら見て取れるのだから。集賢の招請の拒否も、本当に病気だけが理由。残念ながらその後すぐに彼は亡くなったが、かりに病気が治っていたならば、元に出仕して儒者としての務めをはたしていたに違いない。ここではそんな想像さ

え遅くされる。高士なんか何の意味もないのである。それよりも重要なのは儒者として残した功績。だとすれば、病氣をおしてでも彼は元に出仕すべきではなかったのか。

夫れ、(両生は)「礼楽は徳を積むこと百年にして、而る後可なるか」と謂う。其の言、未だ理無しと為さず。然れども百年の内、必ず当に従事する所有るべし。況や礼楽の用為る、天下国家の爲めに一日として無かる可からざる者をや。両生果して大賢なるか。其の本末先後の序に於いて固より宜しく定見有るべし。即ち定見有れば盍ぞ出でて之れを一陳せざる。使し其の言、果して行う可くして、帝従わざれば、去就固より我に在り。(困知記卷上)

異族であろうと覇者であろうとそんなことは関わりなし。現実の支配者以外に支配者はいない。まして礼楽の振興は國家の存亡に関わる一大事。儒者であるなら、与えられた現実の中でこの重い務めを生民のために果たさなければならぬ。儒者の生命線はここにこそある。いかなる時でも逃げ出すことは許されない。ところが劉因は病氣とはいえず、この機会をみすみす逃してしまった。その結果として彼はなんの功績も残さず、単なる隠者で終わったのである。評価されるのは、これではせいぜい天分の高さや学識の広さくらい。儒者として一番重要な責務を投げ出したといわざるをえないのである。となるとあの許衡が評価を高めるのは必然。彼こそは異族支配の下、礼楽の振興に命をかけて奮闘した儒者なのだから。

元の大儒、許魯齋・呉草廬の二人を称するのみ。魯齋は、始終朱子を尊信し、其の学行皆な平正篤実。世祖に遭逢し、致位通顯、未だ尽くは其の志を得ずと雖も、然れども其の時に当たりて、儒者の道の廢されざるは、虞伯生、

魯齋実之れを啓くと謂う。斯文に功有りと謂う可し。草廬は初年朱子を篤信す。其の進むこと甚だ鋭し。晩年の見る所、乃ち陸象山と合す。其の出処の一節は、自り之れを魯齋に例え難し。夫の、一生倦倦焉として聖經を羽翼して老を終えるまで倦まざるが若き、其の志亦た尚ぶ可きなり。

(困知記続上)

ただ単に純正な朱子学を伝承しただけではない。世祖の下、儒者として許衡は実際に大きな功績を残した。劉因はいうまでもなく、呉澄をも凌ぐ元儒の最高峰としての評価が許衡の為に用意されるのである。

許衡を最上位に置き、これより低い位置に劉因。聖人の道への志は認められるものの、道の実現を投げ出した隱遁者。そんな評価で劉因は切り捨てられる。結果として低い評価しか与えられないという点では変わらないものの、劉因を厳しく断罪した先の丘瓊山の劉因評価とはいささか異なった評価の出現である。型にはまった華夷の弁や君臣の義からの開放度といい、生民のために積み上げた儒者として功績に的を絞った人物評価といい、ここに見える整菴の立場は、ある種斬新。いわゆる道学先生的臭味はすこしも嗅ぎ取れない。理の思想から気思想へ。羅整菴が目指した朱子学の修正が一体どんなものであったのか、その中味の一端が窺われよう。

四

さて次は明朝も末期。王朝の疲弊と度重なる異族の侵入に、いやな思いが頭を掠める暗黒の時代。陽明心学の洗礼を受けて理学と心学とを融合し、民族を挙げて国難を打開せんとした孫夏峰（一五八五〜一六七五）に焦点を移して

みる。彼の場合、事情はいささか複雑であるが、結論から言えば、上述の人々とはことなり、「渡江賦」を含めて劉因を全面的に肯定する。「渡江賦弁」に展開された夏峰の劉因弁護の弁は次のとおりである。

先生の此の集、丘瓊山、其の宋の亡ぶを幸とすと為すと謂いて、竟に此れを以て孔廟に祀るを阻む。按ずるに、先生の祖父、五世金に仕うれば則ち宋に於いて原と故主故土の誼有るに非ず。必ずしも苛しく求むるを為さざるに似たり。況や此の賦具在し、滿紙悲憤するをや。只だ善く読まざる者のために意を以て辞を害され、遂に先生の心をして天下後世に白らかならざら令む。中間問答を設為す。北燕の処士と淮南の劍客とは総て先生の一体にして兩名のみ。先生曾て集賢学士を受く。北燕の処士を以て称するは、則ち意知る可きのみ。淮南の劍客の四字、風采為す有り。急ぎ此の人を得て、宋室の為めに氣を吐かんことを望むは、王景略、晋を滅ぼすを欲せざるの意なり。

（夏峰先生集卷八 渡江賦弁）

五代に亘って先祖が金に出仕した金人劉因は、もともと宋と故主故土の関係にはない。宋に対する忠誠を彼に問うのはそもそも筋違い。まして北燕の処士はもとより、宋のために氣をはく淮南の劍客も、どちらも劉因の分身。二人によって繰り広げられる問答の裏面には、どれを採ってみても渡江への悲憤の情がみなぎっているのだから。丘瓊山の劉因評価をこうして正面から否定した夏峰は、つづいて「渡江賦」中の文言をいくつか採りあげ、そこに潜んだ劉因の悲憤の情を抉り出してゆく。その結果、そこに見える元の強勢な様子子の描写も、宋の劣勢を哀れむような「哀し哉、宋君云々」の表現も、元の側に立って宋を敵対視しているのではないことが明らかにされる。それらの言葉は、

誰の目にも明らかな客観的情勢を伝えただけのことであり、その向こう側には、「此の段、字字涙、点点血」の劉因の真情が読み取れる。さらに淮南の劍客が、英雄の出現によって侵入者が駆逐された赤壁や合肥の戦いの再現を願う件となると、宋の劣勢に憤る劉因の心事が洗いざらいさらけ出されている。第一、「処士」や「劍客」の呼称にだって元への抵抗や宋への愛着がにじみ出ているのだから。宋の滅亡を幸とすることなどどうしてありえよう。宋が滅亡して然るべき理由を数えあげる処士の言葉に、「帖然失氣云々」する最後の場面にしても、「滿腔酸楚にして、情を為す可からざる」状態がもたらしたものに他ならず、それだけ宋の滅亡は劉因にとって深刻であったということ。以上が夏峰による「渡江賦」の解釈である。

「渡江賦弁」で展開された、丘瓊山の「宋の亡ぶを幸とす」を反駁するためのこうした弁駁。後に夏峰自身が「余、渡江賦弁有り。惜しむらくは、言軽し。恐らくは信を後の君子に取るに足らず」（夏峰先生集卷八 重修静修祠暨配饗諸賢始末記）と反省するように、これは自分でも必ずしも満足のものではなかった。劉因の真情を引っ張り出して、「渡江賦」の生命を蘇らせてはいるものの、元への敵対心と宋への愛着が払拭しきれしていない。これでは自身が言うとおり、識者の支持は覚束ない。こうした夏峰自身の不満を補ってくれたのが、実は清の支配下に生きた儒者全祖望。劉因と同じく異族の支配下に生きることを余儀なくされた祖望が、修正を加えながらも、夏峰を基本的に引き継いで展開する「渡江賦」の解釈は、次のとおりである。

許文正と文靖とは皆な元人なり。其の、元に仕うる、又た何ぞ害有らん。論者乃ち夷夏の説を以て之れを網するも、

是れ天作の君の義を知らざるなり。豈に身、元人為りて、自ら宋に附する者有らんや。真に妄言なり。文正元^に仕え、文靖は則ち否らざるは何ぞや。文靖、蓋し元の為す有るに足らざる知ればなり。其の建国の規模、取る可き者なし。故に身を潔ぎよくして退く。然らざれば、文靖已に集賢の命を受く。竟に出づるを欲せざる者にあらざるなり。渡江の擧、宋曲りて、元直し。文靖、宋の奸臣の誤る所と為りて行人を留めて以て師讐を挑むを傷むのみ。蘇天爵、以て哀しむと為すは是なり。宋を哀しめば則ち固より其の亡ぶを幸とするに非ずして、亦た之れを存するに意有るに非ず。所謂身を事外に置きて言う者なり。

（結埼亭集外編卷三十三 書劉文靖公渡江賦後）

人の朝に立ったならば、道を明らかにするだけではすまされぬ。必ず道を実現して社会に裨益しなければならぬ。元に仕えて儒者としての役目を果たした許衡はその意味で、責められる理由は何もない。一方劉因は彼と違い、「其の建国の規模、取る可き者なし」、つまり今は出仕の時ではないと判断した。社会の混乱が沈静化するまで時を待つというのである。混乱がいつ収まるのか定かではないが、その時こそが出番。それまではとりあえず田間で道を明らかにする。乱世にあってはこうした生き方も許される。劉因の隠棲はかくして選ばれた。どちらの道を選ぶかはあくまでも自らの決断。どちらを選んでも非はない。出仕拒否は元への抵抗などではないのである。

劉因の出処に関する、ややもすれば感情に流されがちな夏峰の解釈。これを修正した祖望は、さらに「渡江賦」の核心に迫ってゆく。故国・故君の恩義のないことを認めながら、宋の滅亡に愕然たる思いを禁じえない劉因。まず退けられるのが孫夏峰のこうした主張である。「哀い哉、宋君」、かつて蘇天爵は「渡江賦」にみえる劉因の宋への思い

をこう表現したが、これこそが真実に近い。なぜなら、使者を幽閉して還さない、しかも故国・故君の恩義などない宋に対して、「存宋」の感情など劉因に沸き起こるはずはないのだから。元はもとより宋からも中立。いかなる国家にも偏せず、国家と民族の将来を見据えた高所から歴史の一ページを眺めている。「身を事外に置」いた「高士」とはそんな人物。裏切り者でもなければ、単なる隠者でもない。新しい劉因像がここに結ばれたのである。

全祖望は自らの「渡江賦」解釈の正当性を補強すべく、おびただしい数の詩句の文言を劉因の文集から拾い上げる。清朝の学者らしい精緻な分析力が披露されるのだが、これについてはここで詳しく触れる余裕はない。ただ、「言軽」と反省した夏峰の「渡江賦」解釈が、止揚されたことだけは間違いない。感情が抑えられた分、かえって宋や元の非を、静かではあるが力強く鳴らしている。

五

劉因の「渡江賦」についての三通りの解釈をここまでみてきた。劉因と許衡とをどう評価するのか。この点を絡めてその特徴を整理して分類し直すと、およそ次のように纏められるのではないか。

- A すべての価値判断を超越的な理に委ねる丘瓊山型。異族の元に中国の支配者としての正統性は認められない。「渡江賦」は、ここでは額面どおり元に与して宋の滅亡を幸とするものとみなされ、全否定。異族王朝に出仕した許衡もさることながら、たとえ元朝への出仕を拒んだとしても、宋の滅亡を幸とした劉因は民族の裏切り

者として強く非難される。

B 気を最優先する羅整菴型。Aと同様に「渡江賦」は額面どおりに元の侵攻と中国支配とを認めたものと理解される。ただここでは、Aのようにこれが全否定されることはない。歴史の事実を受け入れる立場としてむしろ高く評価される。問題なのは、元朝の支配を事実として認めていながら、儒者としての経世の責務を元の下で果たさなかったこと。従って、元に出仕して學術と政治の両面で十分な功績を挙げた許衡は高く評価されるものの、學術ではともかくも、政治の面では何の功績も残さなかった劉因は無用の隱者として切り捨てられる。

C 理と気との融合を図る孫夏峰型。「渡江賦」はここでは額面どおりに受け取られることはない。「渡江賦」の言葉の背後に隠された劉因の真情があぶりだされ、民族と国家とのあるべき姿を求めるより高次の立場から、眼前に繰り広げられる権力闘争に非を鳴らす詩賦として捉えなおされる。実務で役割を果たした許衡よりも、功績こそ残さなかったものの、「渡江賦」と出仕の拒否という生きざままで、身をもって民族と国家とのあるべき姿を示した劉因にはきわめて高い評価が与えられる。

大筋、この分類に誤りがないとすれば、真っ先に目に留まるのは、「渡江賦」の解釈と劉因の評価の両面で正反対の立場を取るAとCとの違いであろう。しかし、注意深く見ると、たとえ正反対に分かれていようと、Aほど露わではないものの、Cにも、評価の根底に華夷の弁や君臣の義がしっかりと据えられていることが分かる。さもなければ、「渡江賦」の裏面を読み解く必要などないのだから。出発点は同じなのである。両者には原理的な違いはない。

ところがBとなると、話は違う。君臣の義はともかくも、華夷の弁からの解放がそこにははっきりと見て取れるからである。あの強固な民族意識が影を潜めているのである。こうなると、A・Cに対するB。そんな構図を思い描いてみたくもなる。明代における唯物論哲学の先駆。⑤ まして羅整菴はそんな称号で呼ばれたりもする。唯心論の範疇で語られる丘瓊山や孫夏峰とは扱いが違うのだから。

そもそも羅整菴の気思想は、朱子学的理が持つ超越的性格を払拭して理から人間を解放することに狙いがあった。そのため彼は、いたるところで理から超越的性格を払拭すべく努力を試みる。朱子はもとより気思想家の先駆、あの張載でさえもその「太虚」が、「太虚に由りて天の名有りの数語、亦た是れ理氣を將って見て二物と作す」として批判を浴びせられるほどである。整菴によれば、他でもない劉因も、実は朱子や張載と同じ過ちを犯しているという。

「退斎記」に云う。凡そ事物の夫の道の体に肖る者は、皆な洒然として累する所なく、変通して究む可からずと。

即ち其の言の如くんば、則ち是れ所謂道体なる者、当に別に一物為りて、事物の外に立つべし。而して所謂事物なる者、道体と二と為らざる可からず。苟しくも、肖る有れば、亦た必ず肖らざる者有り。夫れ器外に道なく、道外に器し。所謂器も亦た道、道も亦た器、是なり。而かるに顧って之れを二にする可けんや。 (困知記続 卷上)

整菴の劉因評価が低い理由も、根本的にはこのあたりに由来すると思われるが、ともかく、非難されるのは、ここでいう「道体」、すなわち理が、「別に一物為りて、事物の外に立つ」という点なのである。しかし、それで本当に理の超越的性格が払拭できるのか。宋儒程伊川の禅宗批判の言葉をかりて発せられたた彼の次のような言葉を見られた

い。

(程伊川)云う有り。禪家の性を言う、猶お太陽の下に器を置き、其の間、方円大小同じからざるに、特だ此れを彼れに傾けんことを欲するときのみ。然れども太陽に在りては幾時にか動かん、と。伊川の此の語、以て禪家の謬を破するに足る。然れども又た言う。人の、性に於ける、猶お器の、光を日に受けるがごとしと。受の字は固より傾の字と類せず。但だ此の譬え、終に未だ親しからざるを覚ゆ。

(困知記 卷上)

伊川と同じ立場から、方円大小それぞれ異なる器に、太陽そのものを取り込もうとする暴挙として禪宗を強く非難する整菴。返す刀で伊川も切り捨てる。光を日(太陽)に受ける器があるなら、授ける物がなければならぬ。これでは氣(器)とは別に日が一物としてあることになってしまう。例によっての主張である。しかし、一物としての太陽をいくら否定しても、器は常に照らされているのだから、不滅の太陽が常に輝いてなければならぬ。見えないけれど太陽は常にあるのである。となると、これこそまさに超越者ではないのか。超越者が一物としてあることをいくら否定しても、一物を超えたレベルに超越者が存在することを否定できない。彼がしばしば批判の槍玉に挙げる『楞嚴経』の幻妄観も、この立場に立たないかぎり斥けるのは困難。世界が幻であるなら、超越者も何も要らない。すべては無。ちゃんとあるのなら、あらしめるものがどうしてもなければならぬ。幻妄観が成立するか否かは超越者の有無にかかっている。超越者の想定なしにこれを否定することは不可能。⑥ 整菴にあっては、超越性は払拭されたのではなく、まさに太陽のように手の届かないところに追いやられただけなのである。「氣の理」の思想の、こ

れが正体なのではないか。

理であるかぎり、超越的性格を持つことは避けられない。しかしそんな実態を持つ理と、整菴は正面から向き合おうとしない。そうなると残されるのは、思考を停止して逃げ出す道しかない。「然る所以を知る無くして、然るあり。一物の、其の間に主宰して、之れを然らしむる者有るが若し」(困知記続 卷上)。逃げると云わずして、これをなんと言おう。しかし、いくら逃げても、逃げ切れない。手の届かないところに追いやられた理は、「転折の処」(同上)、すなわち事物が変化する瀬戸際(典型的な具体例を挙げると、王朝交替期)で必ず降りてきて、揺らいだ秩序の立て直しを図る。「氣の理」の思想家の真価が問われるのはその時。

衣服・飲食・宮室・輿馬自り、以て冠・婚・喪・祭に至るまで、必ず須らく貴賤に等有り、上下に別有るべし(同上)。

ところが、これがその結論。上下・貴賤、人間の等級は予め定められている。聖人作制の礼樂も疑問を挟む余地はない。ここでは贅肉をそぎ落とされた封建倫理が、権威付けし直されて蘇っている。先に見た、ある種斬新な(渡江賦)解釈も、実はこれと同じ。夷狄も中華も、人は挙げて弱者と強者に弁別される。弱者の位置に固定された人民は、強者である支配者に、臣として必ず奉仕しなければならない。そんな重苦しい義務の履行が万人に押し付けられている。この義務の履行を怠れば、無用の隠者としてただちに切り捨てられる。装いが新たにされていても、中身は少しも変わらない。封建倫理はギリギリのところでもむしろ補強され温存されているのである。選択の自由もなければ、意

志の自由もない。「封建倫理の痕跡がまだ残っている」(理学叢書 困知記前言)ですまされるのか。理と氣とが隔絶しているという点でAとBとに違いはない。A・C対Bという図式はそもそも成り立たないのである。

「理は氣の理」、こうして見てくると表現こそ刺激的であるものの、新しい中身は何ら盛り込まれていないことがわかる。これを孫夏峰の「識吾説」なる一文と比べてみよう。描かれた世界は、はたしてどちらが解放的といえるのか。

吾、吾と周旋して久しきも、初めは吾を識らざるなり。乃ち今、恍惚として之れを識るも、猶お未だ遽には認むる能わざるなり。人、人を識らずと謂へば、人も信じ易し。吾、吾を識らずと謂へば、吾も亦た信じ難し。初め、吾は、実に吾を識らざるを知らざるなり。吾身有り。天・人、焉れに參ずる者なり。仰いで天に愧ずる無きもの、何くに在りや。俯して人に作ずる無き者、何くに在りや。此の身をして愧じず、忤じざら令むる能わずして、吾を識ると謂わんや。吾、身有り。志・氣、焉れに合する者なり。帥して志に惡む無き者、何くに在りや。充して氣に餒える無き者、何くに在りや。此の身をして惡む無く餒える無から令むる能わずして、吾を識ると謂わんや。(中略)

吾、敢えて吾を識ると謂わんや。静言かに之れを思うに、吾、吾を識らざるも、人、吾に負かんや。吾、吾に負かんや。仍ち靈を夫子の、吾の好む所に従わんに乞う。此れ、吾を識るの路なり。吾を識らざれば惡んぞ能く吾に従わん。能く吾に従えば、吾を識らざるを患えず。諸子各々吾有り。吾各々好む有り。亦た第だ各々好む所に従わんのみ。

(夏峰先生集 卷八)

即自の自己から出発して、自己が真の自己になるまでの道筋がここには示されている。自己を超える者との絶えざ

る闘いのうちに訪れる「識吾」体験。ここで忘れてはならないのは、主人公が、常に生身の人間であるということ。遠くに控える超越者などどこにもいない。真の自己は、好悪を追い求める生身の人間のなかにこそある。真の自己と向き合い、ついにはこれと一味になったそのとき、人は始めて「吾を識」る。「吾を識る」ことから解放された究極の地。自己を超える者の奴隷でもなければ、これから逃避するでもない。これを自在に操る一個の自由人がここに誕生する。君臣の義や華夷の弁が復活したとしても、盲目的なそれとは全く違う。あくまでも自己が自由に創造したものだ。放縦とは最も遠い位置にある真の自由に、人はやっと辿りつくのである。「身を事外に置」いた「高士」も、こうした自由人ではなかったか。出仕拒否の道を選んで意志の自由を行使した劉因。強者に対する抵抗という、「渡江賦」に込められた静かなメッセージ、これを読み取るのは、同じ自由人だけ。自由人同士の、時を越えた共感がそこにはある。丘瓊山や羅整菴にはありえない世界。図式に話を戻すなら、認めなければならないのは、原理的には差はなくても、A・BからCへの展開。気が上昇して理と気が溶合したCは、理と気が隔絶するA・Bとは明らかに違うのである。A・C対Bという図式を描くのはやはり無理。宋明思想史の展開とは、こうした自由を求めての遅れたる歩みだったのではあるまいか。

六

黄宗羲はかつて「(羅整菴)先生の、理気を言う、朱子に同じからず。而るに心性を言えば、則ち朱子に於いて同

じ。故に自ら其の説を一にする能わざるのみ」(明儒学案 卷四十七)として整菴の理氣論と心性論との間には矛盾があると思括した。理や性が主導する朱子学の理氣・心性論の範疇から理氣論では抜け出しながら、心性論においてはそこから一歩たりとも踏み出そうとしない整菴への、陽明心学に与する立場からの不満の表明であろう。しかし、見たとおり気の理というからには、氣を超えた理が前提されていなければならぬ。見えないところに押しやられてはいるが、理はしっかりと輝いているのである。整菴はそこから目をそむけて、ひたすら「氣の理」を主張する。もはやそれは信念という他はない。信念の下にある論理のレベルとなると結局は理優先。理氣論と心性論との間には何の矛盾もないのである。

劉因の「渡江賦」、及びその周辺を整理することによって浮かび上がってきたのは、宋から明への思想史の展開に乗り損なった羅整菴思想の実態であった。もとより氣の思想家は羅整菴だけではないし、氣の思想家に分類される人物がここに示した図式にすべて当てはまるというわけでもない。理の思想家も、理氣の融合を図る思想家もそれは同じこと。個々の思想家の特色の洗い出しはこれからの課題にしたいが、氣の思想家だから理の思想家よりも進んでいる、そんな安易な決め付けがほとんど意味を持ちえないことだけは最後に付け加えておきたい。

注

① 読者の便宜に供すべく、「渡江賦」全文に句読を付して末尾に掲げておく。

② 本稿で採り上げた思想家達の何人かについて、筆者はすでに論文を発表している。「劉因について」（福岡大学総合研究所報 第七十九号）・「羅整菴についての一考察」（町田三郎教授退官記念 中国思想史論叢）・「孫夏峰小論」（福岡女子大学 香椎潟四十九号）等がそれである。論述の都合上、これらの論文の記述と一部重複があることを断っておく。

③ 『明史』（卷五十五 礼四）には明初に従祀された人物の名が列挙されているが、許衡の名はみえても、劉因の名をそこに見出すことはできない。

④ ちなみに崎門の流れを汲む楠本碩水も、「蓋し、未だ其の全集を見ず」（『碩水先遺書』卷十）として、綱齋は「渡江賦」をみていなかったと想像する。ただ、仮にこれを目にしたとしても綱齋の劉因評価に変わりはない、と考えるのが碩水の立場。碩水は綱齋を、後述する孫夏峰に近い立場に到達しているとみなしている。そうすると丘瓊山と浅見綱齋を一緒に取り上げるのはナンセンスということになるが、その場合でも、両者が理主導型の思想から出発したことに疑いの余地はない。

⑤ 羅整菴にこうした位置づけを与えた代表の一人を挙げると、日本では「明清時代における気の哲学」の山井湧であり、中国では『中国唯物主義思想史』の張岱年であろう。

⑥ 幻妄観（『楞嚴経』）批判の主旨は、世界は幻なんかではなくちゃんとあるということ。この主張が根拠をもちうるためには、事物を超えたものの存在が認められなければならない。幻ではなく、山河大地はちゃんとある。

だとすれば、その根拠、分かりやすく言えばそれを造ったものがあって、それが幻ではないことを保障しなければならぬ。それがなければ幻妄観は否定できない。山河大地が幻であるのなら、その根拠も超越者も必要はない。すべては幻なのだから。幻妄観は成立する。世界はちゃんとある。だからこそ事物を越えてその存在を保証するものが必要になる。超越者の存在の容認が、宗教成立の要件の一つであるとするならば、事物を超えるものを前提せざるをえない整菴の思想は、彼が批判する仏教よりも強い宗教的性格を備えている。

渡江賦

郝幹林奉使南朝。九年不還。今国家大举方輿。宋君会獵于江東。因之以問罪。北燕処士。慨然壯其事。乃計地勢審攻守。将草渡江策以助之。淮南劍客。聞而過之曰。今茲大举。長江必可渡乎。江東必可克乎。君其為我言其勢。処士曰。昔我国家初基創元。順斗極運天闕。握雄図祭雪壇。神人赫爾折箭首之。遂超大河橫八荒。跨北岳漂九陽。南極破而朔風烈。長星滅而北辰張。繼々承々。臣僕萬方。其威益振。其武益揚。外壓中原。勢開混茫。蠢爾蠻荆。何癡而狂。自取征伐。孰容爾強。今乃提天綱頓地統。竭冀北之馬。会天下之兵。御枚疾走。撰号而南行。然後駢部曲列校隊。愬元戎誓將帥。橫堅陣于高岡。招勝風于大旆。鼓角鳴于地中。旌麾扞于天外。驍騎輕車。凶礪隱旬。玄幕綠徽。飛揚掩藹。魚麗長蛇。撼搖覆載。長鋌雪点。流矢雨飛。霜矛電激。神劍颯馳。精甲雲屯。白日争輝。扇撩原之猛勢。奮蓋世之雄威。嗚呼噫嘻。吾想夫陰山虎土。茹毛飲血。状若神鬼。氣傲霜雪。嬉於戰鬪。業在征伐。咆哮而羆兕怒。感激而風雲

變。頽崑崙而翻海浪。折江河而崩雷電。川谷為之蕩波。丘陵為之震眩。使彼淮方之矮馬。蠻溪之豪族。延目望之。固足以拳拘湍汗。免胄閔袒。進不敢敵。退不敢竄。我乃擊奔霆而倏昇。怒長風而迅征。一叱而建瓴折筆。再鼓而瓦解土崩。於是豐還剝塹。麾城下邑。灌以流潦。礮以巨石。前喉後背。左排右掖。一日之間。一方之地。開拓千里。遂乃進楚泗。援江都。擊丹陽。取南徐。浙西之津破矣。擁廬壽。跨烏江。濟蕪海。攻建康。淮南之戍潰矣。平舒剪斷。順流而下。徑入潯陽。江東之渡得矣。掠荊州。掩黃岡。下江陵。困武昌。湖北東西之虞通矣。于時六師奮楫。木馬吞舟。駕黃龍之雲颿。御五牙之蜺幃。斷橫江之鐵鎖。焚柵岸之河樓。其勢人々清河公。一々韓擒虎。小王濬之樓船。凌伏波之銅柱。朝發舳艫。夕會南隅。囊括百越。杯觀五湖。靈旗所指。席卷長驅。哀哉宋君。可憐也。戰則為黃泉之土。降則為青衣之奴。上絕奎宮之運。下失皇祐之區。草滿金陵。鹿走姑蘇。五溪焦土。七澤丘墟。何其痛哉。客聞之而笑曰。信如公言。以謂遂無宋矣。曾不知大國有征伐之力。小國有御敵之勢。而我長江所以限南北。山川所以界封域。外則西接巫峽。東至海陵。相望萬里。烽櫓旗亭。其形勝也。臨谷為塞。因山為嶂。振扼喉矜。天設巨防。蒼龍玄武之制。白狗黃牛之狀。鐵瓮銅梁之固。劔門石關之壯。峭峽東之狼尾。聳荊門之虎牙。持夔州之百牢。揭瞿塘之兩崖。鳥道盤空。斷牙刺天。馬不得列。車不能旋。一人守隘。萬夫莫前。彼雖有懸車束馬之勤。棧雲梯石之役。我主彼客。彼勞我逸。財殫力痛。切不補患矣。內則灘流迅急。波濤洶涌。狂瀾佯走。絕筆障壅。其所鼓卜ウ。則盤渦谷角。濤陵山頽。隳雲遁雨。怒風轟雷。狀如天輪膠戾而激軫。又似地軸挺拔而爭廻。吞淮飲海。滔天而來。中有舟艦被江。旌甲燭日。金翅青龍。風鳥水鷁。連檣萬里。シヨウ柂千尺。槁工舟師。選白閔。萬靡颼風。翫靈宵。掬馮夷。策天吳。察象馬之神機。

責千里于須臾。東守偃城之塙。西屯採石之戍。一舸捭津。萬夫莫渡。孫權割險而自霸。曹丕望洋而廻取。加之以春水方生。漲氣連天。霧鬱薰蒸。玷墮飛鳶。彼雖有甲騎百萬。橫屯北岸。安能飛渡我長江乎。又若船襄漢之粟。漕江淮之資。發武庫之兵。剝犀象之皮。鏤銅牙於龍川。伐竹箭於會稽。使巴渝趨捷。善鬪之夫。服而用之。亦足以抗衡中原。隔障蠻夷。退以堅守。進以功持。又有義士奮袂。良將登壇。既有枕戈之劉琨。豈無擊楫之謝安。假祖逖以黃鉞之威。拜陸遜以都督之權。而曹公赤壁之役。苻融合肥之戰。公獨不聞之乎。処士曰。表裏山河。備敗而已。堅甲利兵。應敵而已。以勢御勢。固未知其孰利。曾不知應之以大機。昭之以大義。而有不可御者。我請為子籌之。我直而壯。彼曲而老。我有名而衆。彼無義而小。一也。彼江塞之地。盤巨萬里。分兵以守之。則力懸而勢屈。聚兵以守之。則保此而失彼。二也。彼持衣帶之水。拋手掌之隅。將墮兵驕。傲不我虞。其備愈久。其心愈疎。三也。彼刑鄂之民。旧經剪伐。久痛瘡痍。見旃裘而膽落。夢毳窟而魂飛。今聞大舉。重被芟夷。人心搖落。士卒崩離。四也。彼留我奉使。讎我大邦。使天下英雄。請纓破浪。屈視長江。亦有年矣。今天將啓。宋將危。我中國將合。我信使將歸。應天順人。有征無戰。五也。孰謂宋之不可曷耶。客於是怙（怙）然失氣。循牆匍匐。口怯心碎。不知所以對矣。